



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国文学研究資料館長

ロバート キャンベル

Robert Campbell

米国出身の日本文学研究者で、東京大学大学院教授から「国文学研究資料館」の館長に就任したロバート キャンベル博士。国内外に点在する日本の「古典籍」を調査・収集し、そこに残された知恵や知識を現代に活用する事業に積極的に取り組んでいる。世界でも稀な資料館が日本に存在する理由、古典にも現代作品にも垣間見える日本人の特徴、近年の「共感」への違和感——多岐にわたり、示唆に富む話をいただいた。

言語遺産の継承と 新たな「知」の創造に向かって

千三百年の歴史を刻んだ 「古典籍」を調査収集

——二〇一七年四月、東京大学

大学院教授から「国文学研究資料館」（国文研）の第七代館長に、外国人として初めて就任されました。まず、読者にはなじみが薄い国文研についてお話を伺えますでしょうか。

キャンベル 国文研はもともと国の機関として一九七二年に創設され、四五年の歴史を持っています。現在は、「大学共同利用機関」として日本のあらゆる研究・教育機関とさまざまな分野で共同研究を推進する、というミッションを受け、一つ一つの研究機関ではできないことを行っています。

根幹事業として行ってきたの

は、日本の古典籍（近代以前に筆写または印刷された和書）を調査し、書誌データと画像で集積することです。国内はもとより世界中に点在する、日本の明治以前の文献を見いだし、写真に収め、実物も収集して世界の共有の研究素材として公開し活用するのです。

——古典籍の現物を調査し収集するのですか。

キャンベル 国文研は現物主義です。まず、古典籍の在りかを突き止め、実物がどういう状態にあるか、書物としてどのような特質を持っているかを調べます。江戸時代の版本であれば印刷はいつの時代の技術なのか、

出版の母体はどこなのかなどの調査をします。次に、古典籍の全編画像を撮影し、マイクロフィルムや電子画像で全て保管するとともに、研究者や一般の方々に開放して活用を図っています。

古典籍の書誌学的な調査は、国文研の研究者と日本の津々浦々の大学・博物館の研究者・学芸員らが、地域ごとに協力しながら行ってきました。国文研は創設以来、そのような「国家百年の計」とも言うべき地道な仕事を続けてきたんです。

——それを今も続けていますか。

キャンベル コツコツと続けています。日本は関東大震災で首都が破壊され、第二次世界大戦の空襲で全国的に大きな打撃を受けて、文学資料や記録史料、

日本人の精神生活を証言するような書物が数多く失われました。日本人は昔から文字資料を大事に伝承するメンタリティーを育んでいました。しかし、戦後、核家族化や地方から都会への人口移動が進むなかで、江戸時代の版本や先祖代々の家の記録などがどんどん破棄されていきましました。近代百年の間に自然破壊が進んだのと同様に、昔の人々が墨と紙で記録し、伝えてきた資料も犠牲になっていったのです。

国文研は、そのように日本の言語文化・精神文化が削がれていく状況に危機意識を募らせた人たちが創設した研究機関です。戦前から戦中に研究者になった世代が中心となって設立運動を起し、政治家に働きかけて、創設に尽力しました。こ

うした研究機関はイギリスやフランスにもありそうでありません。ですから、これからどんなことがあっても、人類の遺産として日本の古典籍をここにどうめ、整理し、広く活用できるように提供し続けなければならぬと考えています。

—— 国文研には四〇万点以上の画像と原資料があるとのことですが、これで古典籍の何割を網羅していることになりませんか。

キャンベル 半分もあります。日本の古典籍は千三百年の歴史があり、その種類も多様です。一八八〇年代に定着した近代的な「文学」の範囲では分類できない古典籍が少なくないです。たとえば江戸期の「絵俳書」は、俳諧の作品と一緒に多色刷りの素晴らしい絵が描かれています。それを文学か美術か、と問うのは無意味です。絵俳書は読むだけでなく、目でも楽しむものだったからです。文字と図像が密接に絡む古典籍は多く、文学か医療か思想なのか、線引きが難しい場合があります。

また、古典籍は大多数が古文

や漢文で、くずし字で書かれています。国文研では、少しずつですが、それを現代の日本人が読める活字に置き換える取り組み、「翻字」も進めています。

—— 明治維新を境に、書き言葉は古文から言文一致体へ、表記もくずし字から楷書体へと一変した結果、日本語が断絶されたと言語を鳴らしていらっしやいますね。

キャンベル 江戸期の地方文書などで、現在の活字で読めるものは全体の二割もありません。九割以上がまだ原本（くずし字）のままです。ほとんどの日本人

が読めないものとして放置されているのです。近代以降、日本の文化だと語られているものが、実は、せいぜい一割の資料に基づいているだけという場合もあるかもしれません。

明治政府が推進した言文一致などの国語政策は、国民国家をつくり、近代化を達成するうえで必要不可欠だったのでしょう。しかしその裏側で日本語に断絶が生じたこと、断絶により削ぎ落とされた言語文化があることを、今私たちは認識しなければいけない。私はそのことを強く思っています。

近世も現代も物語に「期限」を盛り込む

—— お金にまつわる歴史を遡ると、江戸時代の買物には「掛け」が主流で、大晦日になると借金返済に追われる町人が多かったようです。ところが今の日本人は借金や投資にも慎重になってきている。ここにも断絶があるのか、それとも何か共通項でつながりがあるのでしょうか。

ば読者に「手形」を切ったうえで物語が進むのです。そのような特徴が近代以前にも現代にも共通して見られます。

数年前に直木賞を受賞した、葉室麟さんの歴史小説『鯛ノ記』では、豊後の小さな藩で奥祐筆（幕府・藩等で文書・記録を作成する役職）を務めていた武士が、山間の村に暮らす同じ藩の元・郡奉行（地方行政の役職）を訪ねるシーンから物語が始まります。そして、その元・郡奉行が七年前、藩主の側室と密通し、さらに小姓を切り捨てた疑いで村に幽閉され、事件当時から十年後、話の始まり時点では三年後に切腹するように先代藩主から命じられていることが明かされます。元・奥祐筆の若い武士は、元・郡奉行が死ぬのを見届けよ、という過酷な使命を果たせるかどうか。物語は今から三年後の切腹」という期限を切つて、動き出すのです。

—— 近世の文学ではどのような例がありますか。

キャンベル 元禄期に登場した近松門左衛門は心中物の浄瑠璃



Robert Campbell ●ニューヨーク市生まれ。カリフォルニア大学パークレー校卒業。ハーバード大学大学院東アジア言語文化学博士課程修了、文学博士。専門は近世・近代文学で、19世紀（江戸後期～明治前半）の漢文学と、漢文学に関連の深い文芸ジャンル、芸術、メディア、思想などへの造詣が深い。1985年に九州大学文学部研究生として来日。87年、同学部専任講師。95年、国立・国文学研究資料館助教授。2000年、東京大学大学院総合文化研究科助教授に就任し、比較文学比較文化コース（大学院）、学際日本文化論（教養学部後期課程）、国文・漢文学部会（同学部前期課程）を担当。07年、同研究科教授。17年4月から国文学研究資料館の館長に就任した。文部科学省中央教育審議会教育課程部会委員、九州大学経営協議会委員、東京国立博物館評議員会評議員、東京芸術文化評議会評議員なども務める。編著に『ロバート キャンベルの小説家神髄——現代作家6人との対話』（NHK出版）、『読むことの力——東大駒場連続講義』（講談社）などがある。

をいくつも遺しましたが、その悲劇の多くは借金の踏み倒しが原因です。『曾根崎心中』は、遊女お初を馴染み客の徳兵衛が身請けし、妻に迎えようとお金を工面する。しかしその借金をうっかり友人に貸してしまった揚げ句、返してもらえない。自分も返済の期限を守ることができなくなり、徳兵衛とお初は、真夜中に手を取り合って曾根崎天神の森に向かうのです。

心中物は大体そんなパターンです。返済期限という社会的な合意が守られるか、ということが物語の土俵としてあるんです。裏を返せば、それだけ「信用」の力が日本社会では強い。恋が成就するかどうかという要素を超えて、社会の一員として信用を守りつつ生きることができかどうかという要素に、物語が頼っているほどのですから。

——何事も期限を重視して行う

傾向は日本人にあると思います。他方、将来の不確実性に対して日本人は弱いかも知れません。将来の不確実性をコントロールするために自ら期限をつくっている、ということでしょうか。キャンベル 四年近く前に東京オリンピックが決まった際、SNSをチェックしてみたら、単純に勝つたと喜んでいただけでなく、みんなが七年という「期限」を世界から与えられた、だから福島を考えよう、雇用を考えよう等、その時のそれぞれの人にとっての一番の関心事をその期限で解決していこうと考えた。これに私は感動しました。また、組織のマネジメントでも似たようなことを皆さんも感じる場面があるかと思えます。たとえば事業を企画して進めるときに、みんな今は何も解答を持っていないけれども、とにかく打ち合わせを三日後、一週間後に設定するだけで安心するんです。それまでの宿題が出れば、真面目にやってきます。そういうふう

に日本人は時間の踊り場を重ねながら進み、物事を達成する。でも踊り場がない「螺旋階段」は不得意ですね。上がっているか下がっているかわかりにくい。リスクな進み方は、おおむね日本人は苦手とするところで。ただ、リスクだけけれどもハイリターンの成功事例がいくつかその組織の中にあると、割とそれを受け入れるということはあります。国文研について言えば、リスクとは言いませんが従来とは違った発想の事業にも取り組んでいます。小説家や画家、舞台芸術家などを国文研に招き、所蔵資料などを作品づくりに生かしてもらっているんです。そんな新しい事業をどうやって始めたかという、まずタイムスケジュールを作り、全体の構想が固まらないうちに担当する組織と責任者やメンバーも決めました。すると「大丈夫」という雰囲気になり、どんどん事が進んで行ったのです。「期限と器」が決まれば即、動ける。これは日本の健全なカルチャーの一つだと思います。



「共感」が孕む危うさと 「言語遺産」が包含する知恵

——二〇一七年四月に九州大学の入学式で祝辞を述べられました。その際、教養について「他人の目を通じて世界を見る力、言い換えれば共感力」という定義を紹介され、また「理性に裏打ちされない共感ほど危険なものはない」と強調されました。キャンベル 世界の紛争は共感の不足から発生しているという議論がある一方で、アメリカの研究者らが最近、共感の危うさについて優れた考察を発表しています。身近な者への共感が、身近ではない者との戦争を生み

出すことがあるというのです。ポピュリズムの台頭やフェイクニュースの増加も、一つの主義主張への共感で固まったコミュニケーションが起きていると言えるかもしれません。

背景にはインターネットのフィルターバブルの影響もあるでしょう。検索エンジンやSNSで自分の考えを補強するものだけを取り入れたり、自分の好みをアルゴリズムによって推測され、しつこく勧められたりする。考えると恐ろしいことです。ファクトだけでなく異なる思考も排除された、自分だけの濃厚な情報世界に浸ってしまう危険性があるからです。

—— 事実を押さえ、反対意見も取り入れながら、自分で考えることができるかどうか。それができないと、共感の落とし穴に陥るかもしれない。

キャンベル 小中学校で二〇二〇年以降に実施される学習指導要

領のワーキングチームにおいて、強く主張した考え方があります。例えば国語あるいは英語の教育とは、単科毎に考えられてお互いの間に交流がほとんどないが、両方を言語活動として総括的に見る視点が重要だということ。さらに視覚リテラシーという視点も非常に重要だということも主張しました。今、小学校高学年以上の生徒は、ただ文字を見るだけではなく、インターネット上でさまざまな映像や音声と一緒に文字を見ている。そうした生徒の「見る」という状況において、自分で主体的に選び取り、読み込んで決めていく、良し悪しあるいは功罪を判断するための力——リテラシー——の獲得には、英語だけ、あるいは国語だけという単科ではとても対応できません。リテラシーという概念をもっと総合的に捉え、教育に反映すべきだと思います。

—— 日本の古典籍も文学として見るだけでなく、近代以前の人々の生活や知恵の記録として見る

キャンベル 私は日本の古典籍を「言語遺産」と呼んでいきます。その中には膨大で具体的な教え、知恵、知識、感性などが包含されています。文学という枠で切り取ると勉強チックになつて、限られた人にしか遺産は活用されないでしょう。でも、そこから豊富な知恵をくみ取ることが出来る人たちは、文学研究者以外にも無数にいるはず。私は、文学以外の活動にも日本の古典籍を橋渡ししていきたい。

国文研では現在、三〇万点の古典籍の画像をデータベースに構築する大型研究事業を進めています。古典籍を等しくカバーし、文字からも絵からも自在に検索可能にする計画です。他分野で活躍する人や団体と共同研究もしています。国文研は古典籍を調査収集しながら、その先で新しい価値に発展させる工夫を重ねることが大事だと思っています。

—— 本日は、ありがとうございました。